「ふれあい学習」の情報化へ
学校を地域に開く、他者からの評価を生かす

墨田区立墨田中学校　三橋秋彦主幹

＜プロジェクト以前＞

私は、平成7年度に墨田区立墨田中学校（東京都）に赴任する以前に、中央区立佃中学校で「未来の選択」（財団法人コンピュータ教育開発センター）、「私たちのエネルギーと環境」（同）というエネルギー・環境教育用ソフトの開発に関わりました。100校プロジェクトでは、教育ソフト開発・利用促進センター事業推進協力者会議で関わりました。

実践の経過、教訓

先進企画が契機に

墨田中学校で平成8年度から「ふれあい学習」の実践を続けてきました。しかし、当初はインターネットに接続できない環境で、他の先進的な取り組みを横目で見ながら、「ICTを使った授業をやりたくてもやれない」といった状況が4年間続きました。当時はまだICT活用が手探りの状態で、都内のある学校が情報漏洩のためにマスコミにたたかれるという事件もありましたので、慎重に事を進めました。転機となったのは、「ふれあい学習」の情報化がCECのEスクエア・プロジェクトの先進企画「校内LANの構築と活用」に採択されたことです。ワーキンググループの主査である林英輔流通経済大学教授（現・麗澤大学教授）の声かけによりKIU（柏インターネットユニオン）の協力を得てネットデイを行いました。生徒用、校務用に切り分けた、校内のネットワーク設計もKIUのメンバーがしてくれました。

学校の警備主事の人にICTの好きな人がいてその人の協力や、生涯学習団体「墨田区ネット研究会」の協力も得ました。また、墨田中学校では管理職に恵まれていたことも奏効しました。

研究授業→評価の好循環

ICTを活用することで、「ふれあい学習」も多様な展開ができるようになりました。問題解決学習と「ふれあい学習」が連動するのはその例です。ICTの活用により「授業実践そのものが外部の目にさらされるようになった」ために、授業実践者が勉強をして、研究授業をする→評価／改善するという好循環が形成されたことが大きいですね。特に力のある先生が外から見てくれると、励みになります。

また、子どもたちにとっては学校外への働きかけやそこで活躍する人との交流体験によって、主体性

ふれあい学習

全国の学校で行われている「ふれあい学習」は、学校、家庭、地域が一体となることにより、子どもたちと地域の人々とのふれあいから、子どもたちが生き方を学び、心を育てる試みである。

墨田中学校は平成8年度から「ふれあい学習」の実践を通して、学校を地域に開いていった。実践は、文部省（当時）進路指導総合改善地域、東京都ボランティア普及事業といった指定も受け、総合的な学習の典型とも言われるほど高い評価を受けている。

「ふれあい学習」には次の3つのステップがある

第1ステップは「地域の人材を学校へ」、第2ステップは「地域を出て体験へ」、第3ステップは「地域と共に学習を」である。

墨田中学校では、年間計画で各学期各学年1回は第1ステップの講演会を行うと定めている。実際は各学期数回の講演会に発展することもある。「ふれあい」というキーワードのもと、これはと思った人を講師に迎える。そうした中から地域が見えてくるという。

教育関係者の視察も多く、まれに「本校の地域には人材がいないので」と言われる先生がいるという。しかし、「どの地域にもすばらしい輝きのある市井の人がいることに注目しなくてはいけない」と三橋先生は強調する。

同校には、「進路指導地域改善事業推進会議」（校長諮問の会議）があり、テーマや人脈についても話しあわれ、地道な積み重ねが行われている。

や学習の動機づけが高まるという効果が見られます。さらに、交流体験から社会と自分との関わりを体得し、他者の存在や自らの進路を考え始めるきっかけにもなります。

教育は技術ー授業名人の情報源を

私は「教育は技術」であると思っています。一方、ICTも技術です。両者は同じ技術であり、マッチするところがあるのではないでしょうか。この点、これまで教育現場では「教育が技術である」という点があいまいであり、もっとこのことを顕在化させて良いと思います。

地域について調べ学ぶ

「○○教科教育に優れた技術を持った先生がいる」といった情報が皆に分かることが重要です。それが分かると、やる気のある先生はそうした教科技術を持つ先生と交流することで必要なノウハウを得て、実践経験を積んでいくという良循環に入っていけると思います。

しかし、現在は身近に「上手な先生・授業名人」についての情報源がないため、教育技術を高めることが難しくなっています。

とうきょうEDとの協働

「ふれあい学習」は、その後「とうきょうED（えど）」とコラボレーションをしてきました。とうきょうEDは、東京都の公立学校の情報化が遅れていることに問題意識をもった人々が集まり、プロジェクトを展開しています。「社会人講師データバンク」では、墨田中学校は大変お世話になりました。

WebExpoの開発に関わる

また、「ふれあい学習」は、生徒の文脈を獲得する学習です。そのためには発表学習が大変重要で、その考え方をe-learningで実現したWebExpoの開発とその実践は「ふれあい学習」の方向性とは何かを示したように思えます。

10年間を振り返って

「良い授業が生きがい」がICT活用の原動力

私はいわば授業マニアで、良い授業をすることに生き甲斐を感じています。チョーク一本で授業をやりきる自信があります。だからこそ逆にチョーク一本の限界を知っています。私がICTを授業に活用し続けているのは、それならICTも使って授業のバリエーションを広げた方がいいと思っているからです。また、私は情報教育よりは社会科教育にアイデンティティがあります。その意味で教科教育を情報化させることには、多少視野を持っていると自負しています。さらに、教師に成り立てのときに、父親の授業や授業の神様と言われた方の授業を見ています。だから完成度も力量もまだまだだと承知しているからです。

＜成功の秘訣＞

プロジェクトを長続きさせるためには、次の点が重要だと思います。

●フライングをしない

実施するには、適した時があります。

●他者の力を借りる

自分たちでできないことは他の人の力を借りることです。墨田中学校ではKIUの優れたメンバーの方々の力をかりて、校内ネットワークの整備を促進することができました。

●教育技術を磨く

これは教師としての基本であり、良い授業をすることで、そこでさらにICTを活用して外部の人の目にさらすことで、評価してくれる人も出てきます。

＜今後、ICTを活用した教育を行う上で重要なこと＞

いくつか上げることができますが、例えば生徒全員がノートパソコンを持って学校に登校する状況になると、教育が変わります。そうした環境下で授業ができれば、社会科や理科は飛躍的な学習効果が得られると思います。そのためにも良い授業とは何かをきちんと評価できなければいけないですね。